

## 論 文

『資本論』初版の形態Ⅳの位置付けと  
価値形態論書き換えの理論的含意竹 田 真 登<sup>†</sup>

## 要 旨

価値形態論の叙述は、『資本論』初版本文、初版付録、第二版の3つのバージョンが存在する。マルクスは『資本論』第二版を刊行するにあたってこの価値形態論を大きく書き換えたが、その際、改稿のベースとしたのは初版本文ではなく、「問題の科学的な把握が許す限りでこの問題を単純にまた教師風にさえ叙述」した初版付録であった。しかし、第二版の価値形態論は初版本文の叙述内容を損なってわかりやすさを優先したものではけっしてない。では、この書き換えにおけるマルクスの意図はどのようなものであったのか。それを解明する鍵となるのが、初版本文の価値形態論にしか登場しない形態Ⅳである。そこで本稿では、まずこの形態Ⅳの内容をおさえたうえで、商品相互の交換関係という観点から形態Ⅳが初版本文の価値形態論の末尾で展開された理由を明らかにし、さらに「価値表現のメカニズム」において重要な役割を果たす sich beziehen / verhalten の使用法の変化に着目して、初版から第二版への書き換えの理論的含意を明らかにする。

## はじめに

1. 初版本文における形態Ⅳの内容
2. 商品の価値表現と商品相互の交換関係
  - 1) 『経済学批判』における不十分な価値表現の分析
  - 2) 第二版との対比から見る初版本文の「抽象性」
3. 価値表現の回り道と sich beziehen / verhalten
  - 1) 価値表現の回り道と商品語
  - 2) 初版付録における叙述の特徴
  - 3) 「補足と変更」における改稿過程

## おわりに

<sup>†</sup> 立教大学大学院経済学研究科

はじめに<sup>1)</sup>

マルクスは『資本論』の第二版が出版される際に価値形態論の叙述を大きく書き換えている。もともと初版では、価値形態論の叙述は本文中と付録の両方においてなされていた。この付録はマルクスの友人クーゲルマンに勧められて書いた「価値形態の補足的な、もっと教師的な説明」(MEGA II/6, 700, 邦訳28頁)であり、初版の序文のなかで「弁証法的な思考にまったく不慣れな読者」(MEGA II/5, 12)<sup>2)</sup>に対して、本文中の価値形態論の代わりに付録の価値形態論を読むよう指示している<sup>3)</sup>。そして、第二版では、価値形態論を「全部書き換え」ている(MEGA II/6, 700, 邦訳28頁)。

しかし、初版本文と初版付録の叙述方法は大きく異なっており、初版付録をベースに大幅に書き換えられた第二版と初版のあいだには、展開されている内容についても、少なくない差異が見られる。この二つの叙述のなかで大きく目につく差異は、価値形態の発展についての区分である。価値形態論の展開は、ある一商品の、他の一商品での価値表現(形態Ⅰ)、ある一商品の、あらゆる他の商品での価値表現(形態Ⅱ)、ある一商品で他のあらゆる商品が価値表現している形態(形態Ⅲ)と進むが、この先の叙述が異なる。すなわち、初版本文では形態Ⅳと名付けられた、すべての商品の展開された価値形態(形態Ⅱ)が併存している形態で終わっているが、初版付録の方では貨幣形態で終わっているのである。付録の叙述をもとにした第二版では、貨幣形態で終わる区分が引き継がれている。

初版付録の存在からも明らかなように、マルクスは読者への配慮も考慮しており、それゆえ章立ての変更なども行っている。その結果として「本来の内容」が「見えづらくなってしまった」(大河内 2010, 157頁)といえる部分も存在するだろう。しかし、この改版において読み取るべきなのは、マルクスがどこを修正し、それによってどのような論点が強調されたのか、

---

1) 本稿における引用文中の〔 〕に囲まれた部分は執筆者による挿入であり、ゴシック体・イタリック体は原文の強調、下線部は執筆者による強調である。

2) この部分は、初版から第二版への価値形態論の書き換えにともなって、第二版における序文では削除されている。削除された箇所は以下のとおりである。「**価値形態**の分析はそうはいかない。この分析は難解である。なぜなら、弁証法が、前者〔『経済学批判』〕の場合よりもはるかに鮮明だからである。だから、弁証法的な思考にまったく不慣れな読者に、私は次のことを勧めておく。すなわち、15頁(上から19行目)から34頁末行までの部分はすっかり省いたまま読まずに、そのかわり、本書に追補してある付録「**価値形態**」を読む、ということ。この付録では、問題の科学的な把握が許す限りでこの問題を単純にまた教師風にさえ叙述することが試みられている。付録を読み終わってから、読者は本文に戻って35頁から読み続ければ良い」(MEGA II/5, 11f, 江夏美千穂訳『初版 資本論』, 幻燈社書店, 1983年, 10頁)。

3) この付録については、エンゲルスも執筆を勧めていた。MEGA II/43の編集者による解題を参照(434f, 邦訳68頁)。

つまり、これらの叙述の違いからマルクスの意図した書き換えの理論的含意を読み取ることである。

その手掛かりとなるのが初版本文の形態Ⅳである。形態Ⅰから形態Ⅲでは価値形態の発展にともなって商品が獲得する新たな形態諸規定が論じられているのに対して、形態Ⅳはそうした新たな形態諸規定が展開されるわけではなく、独特の内容となっている。そのような叙述部分をなぜわざわざ一つの形態区分として独立させて論じたのか。

周知の通り、日本での価値形態論の議論が盛んになるきっかけとなったのは久留間－宇野論争であり、これは価値形態論の理解にあたっては商品所有者の欲望を導入する必要があるという宇野の問題提起から始まった<sup>4)</sup>。しかし、久留間の反論の通り、20エレのリンネル＝1着の上着という価値方程式を成立させる商品所持者の（欲望にもとづく）行為と、その方程式が与えられた時に商品が自身の価値を表現するメカニズムは区別されなければならない。価値形態論の課題は後者を明らかにすることであるが、宇野の解釈では商品所持者の論理と商品そのものの論理を混同させてしまう。マルクス価値形態論の真髄である、商品が持つ独自の価値表現のメカニズムを掴み取ったのが久留間による解釈であった。

この久留間の解釈を引き継ぎ、さらに発展させたのが大谷である（大谷 2018<sup>5)</sup>）。この論考は価値形態論の解説であるが、新たな観点として「価値形態論で分析されるそれぞれの価値表現は、いずれもそれを含んでいる諸商品の交換関係からつかみだされていること」（540頁）が強調されており、その観点から「それぞれの価値形態に含まれている「逆の連関」（541頁）を解釈し、そして「交換関係の発展という観点から見れば、開展された価値形態から一般的価値形態に移行するさいに、一般的価値形態をつかみだしてくる交換関係と、単純な価値形態から開展された価値形態に移行するさいのそれとのあいだには、発展関係がある」（543頁）という結論を導いている。商品の価値表現の背後にある商品相互の交換関係というこの観点が、初版本文で形態Ⅳが登場する理由を解明する鍵となるのである。

そこで本稿では久留間－大谷の解釈にもとづいて初版本文の形態Ⅳの位置付けを明らかにしていく。先行研究において価値形態論が論じられるなかで、この形態Ⅳもときおり議論に登場する。しかし、形態Ⅳの含意を捉えきれずに「価値形態の不成立」を示すと否定的に解釈する

---

4) 本稿の内容と直接に関係する論点として、相対的価値形態にある商品が価値を表現しようとするのは所有者の欲望に起因しているという主張がある。「所有者を考えない限り、相対的価値形態にある商品と等価値形態にある商品とがなぜそれぞれの形態にあるかがわからなくなり、どちらの商品がどちらの形態にあっても同じことだということになる。価値を能動的に表現する欲求は所有者が持つ欲求であり、一定の商品が相対的価値形態にあるのは所有者があるからである。これに反して、等価値形態にある商品は観念的にあるので、現実的には所有者もまだ現れていない。こう考えてはじめて価値形態の主体的把握が可能になる、という宇野教授の主張」（久留間1957、78頁）。

5) 第11章（「マルクスの価値形態論」）。なお、この論文は同書に再録されたものであり、初出は1993年である。

ものも少なくない<sup>6)</sup>、一方でそれを正しく捉えた場合でも、なぜ初版本文では形態Ⅳが登場することになるのか、という背景まで立ち入らないものがほとんどである<sup>7)</sup>。形態Ⅳを正しく捉えたうえでその登場の背景にも言及している久留間は例外であるが、しかし本格的な分析を行っているわけではなく、コメントを残すにとどまっている<sup>8)</sup>。第1節では、まず形態Ⅳの独特の内容および久留間のコメントを確認し、問題の所在を把握する。

続いて第2節で、大谷が展開した商品相互の交換関係という観点から第二版と初版本文を比較・検討することで、形態Ⅳが初版本文の価値形態論の末尾で展開された理由を明らかにする。さらに第3節では、価値形態論における商品相互の交換関係を導入するにあたって不可欠である「価値表現の回り道」と「商品語」について内容を確認したうえで、初版付録と、第二版刊行のために執筆された「『資本論』第一巻への補足と変更（1871年12月-1872年1月）」<sup>9)</sup>という草稿における、「価値表現のメカニズム」において重要な役割を果たす *sich beziehen / verhalten* の使用法の変化を追跡することで、初版から第二版への書き換えにおけるマルクスの意図を明らかにする。これら通して、形態Ⅳに象徴される初版本文の性格を明らかにし、さらに初版本文から第二版へと価値形態論が書き換えられたことで叙述内容に前進があったことを示したい。

## 1. 初版本文における形態Ⅳの内容

まずは、初版本文における形態Ⅳの内容を確認しておこう。初版の本文では、価値形態論が形態Ⅰ（相対的価値の第一の・あるいは単純な形態）から出発し、形態Ⅱ（相対的価値の第二の・あるいは展開された形態）、形態Ⅲ（相対的価値の第三の、逆にされた・あるいは逆に関

6) たとえば奥山 1990, 211頁, 降旗 2020, 81頁, 中野 1987, 218-219頁など。

7) たとえば尼寺のように、第二版における初版本文の形態Ⅳの削除はたんに叙述方法の変更によるものであると捉える解釈である。「〔初版付録と第二版の〕叙述は確実に理解されやすい結語であるといつてよい。表象にある貨幣形態が価値形態論へ導入され、そして叙述方法が貨幣形態へと上向的に収斂されることにより、非弁証法的な読者にとっても理解されやすい表現の仕方となり、かくしてそのことが「本文」の結語にみる価値の実体と価値の形態との関連やそのヘーゲル流の表現をともしなうさきの簡潔な叙述を削除させることとなったのであろう」（尼寺 1992, 146頁）。

8) 大谷 2018も形態Ⅳには注で触れているものの（519-520ページ）、その内容の確認が主であり、それが初版本文にのみ登場する背景の分析はおこなっていない。

9) 以下「補足と変更」とする。1971年11月末、『資本論』の出版者であるマイスナーから、初版がほとんど売り切れたので第二版を出版したいという連絡がマルクスに寄せられた。これを受けて執筆されたのがこの「補足と変更」である。本草稿に記載されているのは、初版における『資本論』第一巻第一章に相当する内容がほとんどであり、その半分以上が価値形態論に関するものである。この草稿の内容を日本でいち早く紹介したものとして、小黒1988が挙げられる。また、この草稿を活用した価値論研究には第3節で参照する佐々木 2021のほか、Lietz 1984や Hecker 1987, Fröhlich 2003などがある。

係された第二の形態)を経てこの形態Ⅳに至る。形態Ⅲの後に次のように続けて、形態Ⅳの叙述が始まる<sup>10)</sup>。

〔A〕とはいえ、われわれの現在の立場においては一般的等価物はまだけっして骨化されてはいない。どのようにして実際にリンネルは一般的等価物に転化させられたのであろうか？ それは、リンネルが自分の価値をまず一つの個別的商品において表し(形態Ⅰ)、次にあらゆる他の商品において順次に相対的に表し(形態Ⅱ)、こうして逆関係的にあらゆる他の商品がリンネルにおいて自分の価値を相対的に表した(形態Ⅲ)、ということによってである。単純な相対的価値表現は、リンネルの一般的等価形態がそこから発展してきた萌芽だった。この発展のなかでリンネルは役割を変える。リンネルは、自分の価値の大きさを一つの他の商品で表すことをもって始め、そして、あらゆる他の商品の価値表現のための材料として役立つことをもって終わる。リンネルに通用することは、どの商品にも通用する。リンネルの展開された相対的価値表現(形態Ⅱ)はただリンネルの数多くの単純な価値表現からなっているだけであり、その形態においてリンネルはいまだ一般的等価物として現れていない。むしろここでは、おのおのの他の商品体はリンネルの等価物となっており、それゆえリンネルと直接的に交換可能であり、したがってリンネルと位置を取り替えうるのである。

それゆえ、われわれは最後に次のような形態を得る：

形態Ⅳ：

20エレのリンネル = 1着の上着 あるいは = u量のコーヒー あるいは = v量の茶

あるいは = x量の鉄 あるいは = y量の小麦 あるいは = 等々

1着の上着 = 20エレのリンネル あるいは = u量のコーヒー あるいは = v量の茶

あるいは = x量の鉄 あるいは = y量の小麦 あるいは = 等々

u量のコーヒー = 20エレのリンネル あるいは = 1着の上着 あるいは = v量の茶

あるいは = x量の鉄 あるいは = y量の小麦 あるいは = 等々

v量の茶 = 等々

(MEGA II/5, 42f, 邦訳74-76頁)<sup>11)</sup>

10) 形態Ⅰから形態Ⅲの内容については、大谷2018、第11章(「マルクスの価値形態論」)を参照。

11) なお、初版付録と第二版では一般的価値形態の後にはこの形態Ⅳに代わって貨幣形態が置かれており、ここでは一般的等価物の位置をリンネルに代わって、金が占めるという点でのみ一般的価値形態からの変化がある。式は以下の通り(MEGA II/6, 101, 邦訳131頁)。

$$\left. \begin{array}{l}
 20\text{エレのリンネル} = \\
 1\text{着の上着} = \\
 10\text{ポンドの茶} = \\
 40\text{ポンドのコーヒー} = \\
 1\text{クォーターの小麦} = \\
 1/2\text{トンの鉄} = \\
 x\text{量の商品A} =
 \end{array} \right\} 2\text{オンスの金}$$

引用末尾にある式から明らかなように、形態Ⅳはあらゆる商品の形態Ⅱが併記されているものである。リンネルの形態Ⅱを構成するすべての単純な価値形態を逆にすることによって得られたのがリンネルの形態Ⅲであった。ところが、形態Ⅱの段階ではまだリンネルは一般的等価物になっておらず、リンネルの形態Ⅱにおける個別的等価物を構成するそれぞれの商品は「リンネルと直接的に交換可能」、つまり、リンネルの個別的等価物となっている上着、コーヒー、茶、鉄、小麦などの側が望めば、リンネルと自分を交換できる。その際には、それらの商品は自分の価値をリンネルで表現しなければならない。それゆえ、リンネルの形態Ⅱには、逆関係的に上着、コーヒー、茶、鉄、小麦などの形態Ⅰが含まれているのである。そして、それらの商品の形態Ⅰは、リンネルの形態Ⅰがリンネルの形態Ⅱに発展したのと同じように、それぞれ形態Ⅱに発展することができる。このように、あらゆる商品が、リンネルがたどってきた価値形態の発展を通過し、形態Ⅲに至ることができることを示しているのがこの形態Ⅳとして掲げられた諸式である。

以上のようにして形態Ⅳが導出された。しかし、この形態Ⅳに含まれているあらゆる商品の形態Ⅱが形態Ⅲまで発展できるとはいえ、これらの商品の形態Ⅱはすべてが同時に形態Ⅲへと発展することはできない。というのも、形態Ⅲにおいて「諸商品の一般的な相対的価値形態はそれらの商品自体を一般的等価形態から排除する」のであり、「逆にリンネルというよう一つの商品は、それが一般的等価形態を持つようになるやいなや、一般的な相対的価値形態から排除される」(ibid, 39, 邦訳68頁)からである。そのため、すべての商品が同時に一般的等価形態を取ることはできないのであり、すべての商品の形態Ⅱが同時に形態Ⅲに移行することはできない。引用Aの直後に以下の文章が続く。

[B] しかし、これらの〔形態Ⅳを構成する〕等式のそれぞれは、逆に連関されれば、一般的等価物としての上着、コーヒー、茶などをもたらし、それゆえあらゆる他の商品の一般的な相対的価値形態としての、上着、コーヒー、茶などにおける価値表現をもたらす。一般的等価形態は、つねに、あらゆる他の商品に対立して、ただ一つの商品だけに附着する。しかし、それはあらゆる他の商品に対立する商品ならどれにでも附着する。だが、どの商品もが、それ自身の現物形態をあらゆる他の商品に一般的等価物として対立させるとすれば、すべての商品はすべての商品を一般的等価形態から排除し、それゆえ自分自身をその価値の大きさの、社会的に通用する表現から排除することになる。(ibid, 43, 邦訳76頁)

もちろん、ここで説かれているのはすべての商品の形態Ⅱが同時に形態Ⅲへ移行することができない、ということであって、形態Ⅲそのものの不成立ではない。すべての商品が一般的な相対的価値形態をとることによって「はじめて……あらゆる商品はすべて互いに対して価値として現象し、それら商品の価値は、はじめてそれに対応した交換価値としての現象形態を得る」

(*ibid.*, 37, 邦訳62-63頁) ため、諸商品が実際に互いに価値として関連しあうためには、商品世界から一つの商品種類が排除され、その商品種類を一般的等価物に持つ、一般的な相対的価値形態(形態Ⅲ)が成立していなければならない。初版本文の行論では、リンネルから出発し、いったんはこの形態を獲得したのであるが、そこで一度立ち止まって「それまでに展開してきた価値形態論の結果を反省し」(久留間 1957, 30頁)<sup>12)</sup>、ある商品を一般的等価形態に持つ形態Ⅲを獲得するために用いた方法そのものによって、その商品以外のあらゆる商品も同時に価値表現(形態Ⅱ)をおこなう形態Ⅳが導きだされ、それらの商品がさらに形態Ⅲを取りうることを示したのである<sup>13)</sup>。

一見すると一般的な相対的価値形態の、ひいては「価値形態の不成立」<sup>14)</sup>を説いているように見える形態Ⅳであるが、以上から明らかなように、この形態は形態Ⅲの獲得までにたどってきた価値形態発展の過程に「反省」を加え、どの商品の価値表現から価値形態の発展が出発しようと、商品世界のすべての商品が「互いに対して価値として現象」できるようになる形態Ⅲまで発展できること、すなわちどの商品であっても一般的等価物の位置を占めることができること、それと同時に、それらの商品すべてが一般的等価物の位置を同時に占めることはできな

---

12) この引用文の意味するところは、後に考察する。

13) 言うまでもなく形態Ⅱの叙述と形態Ⅳの叙述で取り扱われている内容は異なる。形態Ⅱでは一商品がその形態を取る場合の形態諸規定の内容を、形態Ⅳでは一商品だけではなくあらゆる商品がその形態を取る場合を考慮に入れた際の諸問題を取り扱っているのである。形態Ⅱと形態Ⅳの混同については、大谷 2018, 519-520頁, 注33を参照。

14) このような主張は多く見られるが、たとえば次のようなものがある。「初版『資本論』の本文の価値形態論における形態Ⅳの意味は、価値形態の不成立を説くことにある」(奥山 1990, 211頁)。ここで奥山は、形態Ⅳの議論を曲解し、マルクスがすべての商品の価値形態が一般的価値形態まで「発展しうる」と意図したところを、「(必然的に)発展する」ものとしてとらえ、「すべての商品が貨幣になる」ことと「一商品のみが貨幣になる現実」の整合性を問題にするのである。降旗も同様に、「貨幣の必然性の論証を目的とした価値形態論の論証としては失敗だった」と捉える(降旗 2020, 81頁)。中野(1987)も形態Ⅳの内容を受けて「[初版の価値形態論の]展開は融和しえない且つ解決しえない絶対的矛盾の設定と、価値形態そのものの否定におわった」(219頁)と論じる。さらに第二版の形態Ⅱは初版本文の形態Ⅳが「転位したものである」ととらえ、そこでは形態Ⅳの矛盾が引き継がれて「いわば内部へ折り曲げられた無理は一そうの難解をひきおこさざるをえなかった」(229頁)と主張するのである。「そこで、『初版』本文の「形態四」はそもそもなにかという疑問がおこってくるのもむりはない。しかし、「形態四」をよくみると、すべての自立的商品の拡大された価値形態にほかならず、『再版』以降の第二の形態「全体的な・あるいは拡大された価値形態」は、この「形態四」の転位したものであると解さなければならない」(221頁)。廣松は、自身の価値形態論の解釈のなかで形態Ⅳに言及しているが、そこではとくにコメントを与えることなく中野の著作の上記箇所を含むひとまとまりの文章を引用しているのみである(廣松 2010, 152-153頁)。

その一方で尼寺は正しくも、「一見すると形態Ⅳの成立を否定するかのように思われるこの問題は、従来いろいろと議論されてきた。だが、形態Ⅳはすべての商品が一般的等価物となりえないことを述べているにすぎない」(尼寺 1992, 143頁)と指摘する。同様の指摘は大河内 2010, 174-175頁も参照。

いこと、これらのことを示しているのである<sup>15)</sup>。

これ以降はこれまで展開された価値形態論全体を含めた叙述の総括となる。

〔C〕見てきたように、商品の分析が明らかにするのは、価値形態のすべての本質的な諸規定、そしてその対立的な諸契機における価値形態そのもの、一般的な相対的価値形態、一般的等価形態、最後に、はじめは価値形態の発展における過渡段階をなすが、最終的には一般的等価物の独自の相対的価値形態に転化することになる、単純な相対的価値表現の決して終わることのない列、である。(MEGA II/5, 43, 邦訳76-77頁)

この形態Ⅳで示されている形態Ⅱ、すなわち「単純な相対的価値表現の決して終わることのない列」は、はじめは形態Ⅰが発展した形態として「価値形態の発展における過渡段階をなす」が、「最終的には」この形態Ⅱは逆関係的に形態Ⅲになり、もとの形態Ⅱはその商品、すなわち「一般的等価物の独自の相対的価値形態」<sup>16)</sup>になるのである。しかし、ここで言及されているのは、形態Ⅳで掲げられている形態Ⅱの一般的な位置付けであって、どれか特定の一商品の形態Ⅱについていわれているわけではなく、したがって形態Ⅳで掲げられた諸式のうちどれか一つの商品の形態Ⅱが「最終的に」形態Ⅲに発展し、その商品が一般的等価物になることがいわれているのではない。

〔D〕しかし、商品の分析が明らかにしたのは、商品形態一般としてのこれらの形態であり、したがってまた、これらの形態はどの商品にも附着するのであるが、ただ対立的にのみそうなるのであって、商品Aがある形態規定にある場合にはB、Cなどの商品はそれに対して他の形態規定を受け取るのである。(ibid., 邦訳77頁)

初版の本文で問題になっているのは、「商品形態一般」としての価値形態であり、価値形態をそのように取り扱う限りは、形態Ⅳの叙述よりもさらに進んで、どの一つの特異な商品が一

---

15) 「価値形態論はリンネルを例にとり、それがどのような形態発展の過程を経て一般的等価物になるかを明らかにした。もしリンネルが一般的等価物になるとすれば、そういう過程を経てなったものと考えざるをえないのである。だがそのさいに用いた論証方法によるかぎり、リンネルに限らずどの商品でも同じ過程を経過しうることになり、そして同じ過程を経過する限り、どの商品でも一般的等価物になりうることになる。だが他面において、どの商品もが同時に一般的等価物になるわけにはいかない。」(久留間 1957, 30頁)

16) 「一般的な、他の諸商品と統一的な〔一般的等価物である〕リンネルの相対的価値表現は、20エレのリンネル=20エレのリンネルであろう。しかし、これは同義反復であって、一般的な等価形態にあり、それゆえつねに交換可能な形態にあるこの商品の価値の大きさを表していないのである。むしろ、展開された相対的価値形態……がいまでは一般的等価物の独自の相対的価値表現になる。」(MEGA II/5, 39, 邦訳68頁)

一般的等価物に選ばれるか、という問題は扱うことができない。その問題はまさに交換過程に属する問題であり、次の交換過程の節で取り扱われることになるのである。貨幣形態が価値形態論の最後の形態として置かれていない初本文において、価値形態論の課題は次のように述べられている。

〔E〕しかし、決定的に重要なことは、価値形態、価値実体、価値の大きさの間の必然的な内的連関を見つけ出すこと、すなわち、**観念的に**表せば、価値形態が**価値概念**から生じていることを論証することであった。(ibid.)

初版の価値形態論において設定されたこの問題は、形態Ⅲまでの分析によって明らかにされているといえるだろう。というのも、形態Ⅳでは、一方であらゆる商品の価値形態が形態Ⅲまで発展できること、他方でそれらの価値形態がすべて同時に形態Ⅲへと発展することはできないことが示されているだけであり、その限りでは諸商品の価値関係の新たな在りかたや新たな形態規定が論じられているわけではないからである。しかも、形態Ⅳで述べられていることからの多くは形態Ⅲの範囲内で叙述できるように思われるにもかかわらず<sup>17)</sup>、ここではあえて形態Ⅳという区分が設けられているのである。

それでは、なぜこの補足のよう内容に対して形態Ⅳという一区分が設けられたのだろうか。この箇所の議論について、久留間は次のように解釈する。

このところ〔引用 A と B〕でマルクスは……それまでに展開してきた価値形態論の結果を反省しているのであり、それによってその観点の**抽象性**にもとづく認識の限界を明らかにし、より具体的な観点に立つ交換過程論との間の境界を暗示しているのである。(久留間 1957, 30頁)

「形態Ⅳ」およびそれに付随するさきの考察が、「形態Ⅲ」についての反省であり、そこで与えられた一般的等価物の規定に関連して、価値形態論の抽象的性格を明らかにし、その認識の限界を暗示しているものとすれば、それにつづく右の一節〔引用 C, D, E〕は、さらに一般的に、それまでに展開してきた価値形態論の全体をかえりみながら、その**抽象的性格**を明らかにし、その認識の限界を暗示しているものといえるであろう。(同上, 32頁)

---

17) 実際、第二版では次のことが一般的価値形態の叙述の末尾「3. 一般的価値形態から貨幣形態への移行」で述べられている。「一般的等価形態は、価値一般の一つの形態である。したがって、それはどの商品にでも附着することができる。他方で、ある商品が一般的等価形態（形態Ⅲ）にあるのは、ただそれがあらゆる他の商品によって等価物として排除されるからであり、またそのかぎりでのことである。」(MEGA II/6, 100, 邦訳130頁)

久留間による解釈は、当該部分が全体のなかの補論的な位置付けにあることもあり<sup>18)</sup>、以上で終わっている。では、ここで久留間のいう「抽象性」<sup>19)</sup>とはどういうことだろうか。これを理解するにあたって鍵となるのが商品相互の交換関係である。

## 2. 商品の価値表現と商品相互の交換関係

### 1) 『経済学批判』における不十分な価値表現の分析

ある商品の価値表現、たとえば20エレのリンネル＝1着の上着は、リンネルと上着の交換関係のなかに潜んでいるものであり、価値形態の分析にあたってその交換関係からつかみ出されたものであった<sup>20)</sup>。この商品相互の交換関係は、初版付録と第二版では言及されている一方で、初版本文では叙述にまったく登場しない。この違いの背景にはどのようなマルクスの意図があるのだろうか。この解明にあたって『経済学批判』（1859年）が手がかりとなる。

マルクスは『資本論』以前にすでに一度『経済学批判』の商品論で価値表現の分析を試みている。しかし、『資本論』で展開されている意味における価値形態という概念がないため<sup>21)</sup>、商品相互の交換関係を価値形態という媒介なしにそのまま分析しており、したがって形態Ⅱと

18) 久留間 1957の前篇では、価値形態論と交換過程論の関係についての見解を展開したのち、「いわゆる移行規定」（『経済学批判』と初版本文において価値形態論の末尾に置かれた、交換過程論への橋渡しとなる叙述）が第二版で削除された問題について論じており、形態Ⅳはその文脈で考察されている。

19) 富塚（1962）も形態Ⅳの叙述から「価値形態論……の方法的抽象性」（252頁）を指摘しているが、彼の場合、その抽象性の指摘は形態Ⅳの論点である形態Ⅱから形態Ⅲへの移行にも及んでいる。「価値形態論の主題は……価値概念に適合した価値形態が成立してくる、その順次的な価値形態の発展過程を、「商品分析」の方法的視角から論理的・抽象的に展開するにある。だが、論理的・抽象的な展開であるからといって、第二形態を構成する第一形態の諸等式が「逆の関連」を含むとすることによって、第二形態を簡単にひっくり返して第三形態をうるという方法が正当化されるわけではないであろう」（同上）。ここでは初版本文と第二版の区別はなされておらず、批判は第二版の叙述に向けられている。しかし、次節第二項で見ると、「商品相互の交換関係」という観点から捉えることによって、第二版ではこの初版本文の「抽象性」は克服されたと言うことができるのである。

20) 「価値の現象形態である価値形態の分析に取り掛かるにあたって、なによりもまず留意しなければならないのは、この形態が商品相互の交換関係のなかに潜んでいるのだということ、だから、価値形態の分析は、まずもって商品の交換関係からの価値形態の析出を前提する、ということである。われわれが分析する価値形態は、交換関係とはまったく無関係に頭のなかでつくりあげてみる形態なのではなく、必ずなんらかの交換関係のなかにある形態でなければならないのである」（大谷 2018, 481頁）。大谷 2018（第11章「マルクスの価値形態論」）では、価値形態とその背後にある商品相互の交換関係との理論的連関が強調されている。本稿の続く議論は、同論文の解釈に基づいて展開している。

21) 久留間が指摘するように、『経済学批判』の「価値形態論らしいもの」においては「相対的価値形態と等価値形態との対立関係、価値表現の廻り道、等価値形態の独自性、価値形態で解明さるべき肝心要めの事柄が、ここでは全然問題にされていない」（久留間 1957, 25-26頁）。

形態Ⅲを区別することがないまま、それらが癒着した状態で分析が進められることになる。この問題点は以下の部分によく表れている。

他のそれぞれの商品の使用価値は、それがおなじ大きさの労働時間を表す比率で、1エレのリンネルに対する等価物をなす。だから、この個別的商品の交換価値は、あらゆる他の商品の使用価値がその商品の等価物となっている、限りなく多数の等式で、はじめて余すところなく表現される。……こうして、一商品はその交換価値をすべての商品の使用価値で測ると同時に、逆にあらゆる他の商品の使用価値は、それらによって測られるこの一商品の使用価値で測られる。1エレのリンネルの交換価値が、1/2ポンドの茶、あるいは2ポンドのコーヒー、あるいは6エレのキャラコ、あるいは8ポンドのパンなどで表現されるとすれば、その結果として、コーヒー、茶、キャラコ、パンなどは、それらが第三者であるリンネルに等しい割合で互いに等しく、したがってリンネルは、それらの交換価値の共通の尺度として役立つ、ということになる。(MEGA II/2, 117f, 邦訳227-228頁)

ここでは、一商品とあらゆる他の商品の交換関係が成立していることを前提したうえで、まず一商品がその価値をあらゆる他の商品で表していることを述べ(形態Ⅱ)、つづいてあらゆる他の商品がその一商品の使用価値でそれらの交換価値を表現している(形態Ⅲ)ことが述べられている。つまり、価値表現という概念なしに直接に商品どうしの交換関係を考察し、一つの交換関係に含まれている二つの価値表現を区別していないため<sup>22)</sup>、『資本論』における形態Ⅱと形態Ⅲが区別されることなく癒着した状態で展開されている。そのため、形態Ⅱと形態Ⅲのそれぞれにおいて商品が新たに獲得する形態諸規定を明らかにすることができなくなってしまう。

しかし、このように『経済学批判』では不十分になってしまっている価値形態の分析こそが、商品が自身の価値を表現するためには価値形態を貨幣形態まで発展させなければならないという、商品そのものに内在する論理を明らかにするのである。そしてこの商品の論理こそが、商品生産社会の、さらには資本主義社会の分析にとっての最も根源的な基礎をなしており、この理論展開はマルクスの経済学批判にとって決定的に重要なのだ。そこで『資本論』では価値表現を商品に内在する論理にもつづいて徹底的に把握することで、『経済学批判』と一線を画す内容を展開することができたのである<sup>23)</sup>。

22) この区別について、例えば初版付録では次のように述べられている。「たしかに、20エレのリンネル＝1着の上着……という表現は、1着の上着＝20エレのリンネル……という逆関係をも含んでいる。しかし、そうではあっても、上着の価値を相対的に表現するためには、私は等式を逆にしなければならぬのであって、私がそうするやいなや、上着に代わってリンネルが等価物になる」(MEGA II/5, 628, 邦訳131頁)。

23) 「マルクスは、前著では「価値形態が発展して貨幣形態としてあらわれるに至ってはじめて価値表現の固有の分析をあたえた」といっているが、しかしそこで与えられている価値表現の分析は、前に

## 2) 第二版との対比から見る初版本の「抽象性」

上記の点を踏まえて、さきほどの久留間のいう「抽象性」に立ち返ると、この「抽象性」とは、初版本が『経済学批判』での価値表現の展開の反省をふまえ、価値形態の考察の際に価値表現の背後にある具体的な商品相互の交換関係とその発展を極力捨象し、その交換関係からつかみ出された価値形態を純粹にそれそのものとして分析していることだと考えられる。ここで極力というのは、価値表現の等式「20エレのリンネル = 1着の上着」とそれに逆関係的に含まれている「1着の上着 = 20エレのリンネル」については議論の俎上に登場しているためである。このときリンネルと上着は交換関係にあり、一つの交換関係のなかに二つの価値表現が含まれている、つまり交換にあたってリンネルは前者の価値表現を、上着は後者の価値表現を持っていることが前提となっている<sup>24)</sup>。

この抽象性が大きく問題になるのが、形態Ⅱから形態Ⅲへの移行の箇所である。第二版ではこの部分で商品相互の交換関係の発展を想定しており、こうした初版の「抽象性」はみられない。第二版（と初版付録）では、一般的等価形態（形態Ⅲ）の導出に以下の叙述が含まれている。

実際、ある人が自分のリンネルを多くの他の商品と交換し、それゆえリンネルの価値を一連の他の商品で表現するならば、必然的に多くの他の商品所持者もまた自分たちの商品をリンネルと交換しなければならず、それゆえそれらのいろいろな商品の価値を同じ第三の商品で、すなわちリンネルで表現しなければならない。(MEGA II/6, 96, 邦訳122頁)<sup>25)</sup>

ここでは、形態Ⅱの価値表現が実際に実現している状態、つまりそれらの商品の間に交換関係がむすばれている状況が想定されている。そのような状況のもとでは、リンネル所持者はリンネルの価値を他のさまざまな商品で表現し、それらと交換をおこなっているのだから、逆に

---

も述べたように、けっして本格的なものではない。これが「資本論」では、現にその第一章の内容をなしているその他の諸問題とともに、本来「商品の分析」の領域に属する独自の問題として、交換過程論から分離して純粹の形で、徹底的に論じられることになったのである（久留間 1957, 28頁）。なお、ここで久留間が言及しているように、『経済学批判』では本文で展開した内容とは別に、価値表現を解明する叙述の途中で交換過程の議論を挟んでいるという問題も存在する。そのため、本来は交換過程論に属する内容が価値表現の分析に混入してしまうことで、「価値表現の固有の分析」がまったく不十分なものになってしまっているのである。

24) いうまでもなく、これら二つの表現は、違う価値形態として区別されなければならない。このことは、初版本でも、付録でも、第二版でも言及されている（MEGA II/5, 33, 628, 邦訳54-55, 131頁, MEGA II/6, 82, 邦訳95-96頁）。

25) なお、第二版での形態Ⅰから形態Ⅱへの移行の箇所に含まれる次の一文からも、第二版では価値表現を論じる際にそれが含まれる交換関係を前提していることをはっきりと打ち出していることが見て取れる。「何らかの商品Bでの価値表現は、商品Aの価値をただ商品A自身の使用価値から区別するだけであり、したがってまた、商品Aをそれ自身とは違った何らか一つの個別の商品種類に対する交換関係のなかに置くだけであって……」（MEGA II/6, 93, 邦訳117頁）。

他の商品所持者たちの立場からすれば、自分たちの商品の価値をリンネルで表し、それらをリンネルと交換していることになる。それゆえ、自分の商品で形態Ⅱの価値表現を成立させているリンネル所持者に対して、反対の立場から、つまり他の商品所持者たちの立場から見れば、彼らの商品はリンネルという共通の一商品で価値表現を行うことによって形態Ⅲの価値表現を構成している<sup>26)</sup>。このような交換関係を想定のもと、形態Ⅱが「ひっくり返されて」一般的価値形態が獲得された。

ここで、形態Ⅰ・形態Ⅱと、形態Ⅲの違いに注意を払っておこう。いうまでもなく、価値形態論で問題になっているのは、商品の価値表現であって、現実の交換関係ではない。そのため、ある商品がその価値を他の商品の使用価値で表すといっても、その際に現実には他の商品がある商品の目の前にあることが想定されているわけではなく、その商品の表象が想定されているに過ぎない<sup>27)</sup>。つまり、価値形態論で扱われている諸商品の連関とは、現実の商品相互の交換関係そのものではなく、その現実の交換関係から抽象された、「理論的な、思考上の連関」<sup>28)</sup>である。商品の価値表現もこの前提のもとで考えられており、ある商品の価値表現とは、その商品が他の商品の表象を想定し、その想定された商品の使用価値において自身の価値を表現するという、いわば「個々の商品の私事」(MEGA II/6, 97, 邦訳125頁)<sup>29)</sup>、「純粋に主観的な過程」

---

26) このことは、マルクスが実際に手を加えた、ヨハン・モストが著した『資本論』のダイジェスト『資本と労働』(1876年の第二版)のなかでより分かりやすく書かれている。マルクスは同書の価値形態論の叙述の大部分を修正・加筆しており、その手を加えた部分のなかに次の叙述が含まれている。「交換のその次に高い段階を、わたしたちはこんにちでもまだ、たとえばシベリアの狩猟種族のところで見ることができます。彼らが提供するの、交換向けのほとんどただ一つの財貨、つまり毛皮です。ナイフ、武器、ブランデー、塩、等々といった彼らに提供される他人のすべての商品が、彼らにとってはそっくりそのまま、彼ら自身の財貨のさまざまな等価物として役だっています。……今度は、この取引を、異郷の商品所持者の側から観察してみましょう。彼らの各人はシベリアの狩人たちにたいして、自分の財貨の価値を毛皮で表現しなければなりません。こうして毛皮は一般的等価物になります。一般的等価物は、他人が持つすべての商品と直接に交換できるばかりではなく、また他人の持つすべての商品にとって、共通の価値表現のために、だからまた、価値を計量したり比較したりするものとしても役立ちます」(MEGA II/8, 741, 邦訳39-40頁)。

27) 「実際に交換が行なわれることによって、……価値表現において観念的に表象されていた(思い描かれていた)商品が現実の商品に転化する、つまり実現(realize)される……」(大谷 2018, 483頁)。ただし、「等価形態に置かれ、等価物となっている商品そのものがたんに観念的なもの、表象されただけのものであって、現実には存在する必要はない、と考えられてはならない。等価物として「表象されている」のは実在的な商品なのであり、その実在的な商品が等価物という形態を与えられ、そのような形態をもつのである。貨幣について言えば、金は諸商品の価格の外部に実在的に存在している」(同上, 487頁)。

28) 「……交換価値〔『資本論』でいう価値〕としては、それら〔個々の商品〕ははじめからあらゆる他の商品との連関のなかで考察された。けれどもこの連関は、理論的な、思考上の連関に過ぎなかった」(MEGA II/2, 121, 邦訳232頁)。

29) この箇所は次のように展開されている。「〔形態Ⅰと形態Ⅱでは〕どちらの場合にも、自分に一つの価値形態を与えることは、いわば個々の商品の私事であって、個々の商品はこれを他の諸商品の助

(MEGA II/5, 646, 邦訳166頁)である<sup>30)</sup>。

リンネルの価値表現が「私事」であることは、形態Ⅰから形態Ⅱへと移行しても変わることはない。というのも、形態Ⅱでは、形態Ⅰでリンネルが他の一商品である上着に対してだけ取っていた関連を、あらゆる他の商品に対して取っているに過ぎないからである。このときリンネルはすべての商品の使用価値において自身の価値を表現しているが、それぞれの商品は依然として表象に過ぎず、それらをすべて合わせたところでリンネルの価値表現の「私事」という性格が変化するわけではない。

しかし、形態Ⅱから形態Ⅲへの移行においては、このような状況が根本的に変化することになる。この移行は、形態Ⅰから形態Ⅱへの移行のように、ある商品が他の商品に対する関わりを変えるだけでは実現されない。このことは、形態Ⅲ（一般的価値形態）を成立させる諸商品の関わりが次のような特殊なものであることに由来する。

……一般的価値形態は、ただ商品世界の共同事業としてのみ成立する。一つの商品が一般的価値表現を得るのは、同時にあらゆる他の商品が自分たちの価値を同じ等価物で表現するからにはかならない。そして、新たに現れるどの商品種類もこれにならなければならない。(MEGA II/6, 97f, 邦訳125頁)

このように、形態Ⅲは、一般的等価物以外の「あらゆる他の商品が自分たちの価値を同じ等価物で表現」し、「新たに現れるどの商品種類もこれになら」っているものでなければ成立しない。つまり、「ある商品が一般的等価形態（形態Ⅲ）にあるのは、ただ、それがあらゆる他の商品によって排除されるからであり、またそうされる限りでのことである」(ibid, 100, 邦訳130頁)<sup>31)</sup>。

---

力なしに成し遂げるのである」。この「私事」という比喩は、「商品世界の共同事業」との対比で登場しているが、ここで意味するのは、一般的価値形態においては一つの商品でそれを除くあらゆる商品が価値表現を行う、という諸商品の共同的な行動が必要であったが、それに対して形態Ⅰと形態Ⅱでは、ある商品が他の商品を自分の値札に書き込むだけなので、その商品の行動だけで完結する、ということだ。このような意味で「私事」と言われているのである。

30) 「リンネルとの関係から上着に生じる性格は、……上着の作為なしに存在するのである」(MEGA II/5, 34, 邦訳55頁)。

31) 大谷は、この形態Ⅱから形態Ⅲへの価値形態の発展の背後にある商品相互の交換関係の発展について以下のように指摘する。「このように、開展された価値形態〔形態Ⅱ〕をつかみだした交換関係と、一般的価値形態をつかみだす交換関係とは、一つの商品と他の多くの商品とが取り結ぶ交換関係という、その形態から見るかぎりまったく同一のものでありながら、前者にあっては、他の多くの商品がそれぞれ独立の交換場面にあるものと想定されるのにたいして、後者にあっては、他のすべての商品が同一の交換場面において一つの商品世界を形成しているものと想定されているのである」(大谷2018, 544頁)。

もちろん、この「共同事業」が成立するには、上記のような一般的等価物となる商品とあらゆる他の商品との交換関係が成立していなければならない。一方で、初版本文の形態Ⅲへの移行では、その現実の交換関係に対する言及はない。それでは、ここではどのような事態が想定されているのだろうか。

価値形態論の行論中に商品相互の交換関係が登場しないとはいえ、先に見たように、価値表現は交換関係のなかに潜んでいてそこからつかみ出されたものであり、価値表現を分析するときにはそのことが前提されている。その前提のもとでは、商品 A の商品 B を用いた価値表現のなかには、逆の連関、すなわち商品 B の商品 A を用いた価値表現が潜んでいる。それゆえ、商品 A の形態Ⅱのなかには、それを構成するすべての商品 A の単純な価値形態（形態Ⅰ）に逆関係的に含まれる無数の形態Ⅰ、すなわち商品 A 以外のあらゆる商品が商品 A で自身の価値を表現する形態Ⅰが含まれているのであり、これらの形態Ⅰの総体が商品 A を一般的等価物とする形態Ⅲを構成する。つまり、商品 A の形態Ⅱのうちには商品 A を一般的等価物とする形態Ⅲが潜んでいるのである。

初版本文における形態Ⅲがこのことを強く意識して書かれていることは、形態Ⅲの表題と次の引用箇所から明らかである。

### Ⅲ. 相対的価値の第三の、逆にされた・あるいは逆に関係させられた第二の形態

1 着の上着	= 20エレのリンネル	
u 量のコーヒー	= 20エレのリンネル	
v 量の茶	= 20エレのリンネル	
x 量の鉄	= 20エレのリンネル	
y 量の小麦	= 20エレのリンネル	
その他	= 20エレのリンネル	(MEGA II/5, 36, 邦訳61-62頁)

これに対して、形態Ⅲ、すなわち逆に関係させられた第二の形態であり、したがって第二の形態に含まれているところの形態Ⅲにおいては、リンネルはすべての他の商品にとっての等価物の類形態として現れる。(MEGA II/5, 37, 邦訳63頁)

初版本文においてこれほど形態Ⅲが形態Ⅱに逆関係的に含まれていることが強調されているのは、先に述べたとおり、商品相互の交換関係を捨象しているからである。見たように、形態Ⅲが成立するためには一般的等価物となる商品 A 以外のすべての商品が商品 A で自身の価値を表現すること、すなわち商品 A 以外のあらゆる商品の能動的な行為が必要となる<sup>32)</sup>。しかし、

32) 第二版では商品世界の共同事業が成立していることは、一般的価値形態の式が初版の形態Ⅲの式とは対照的に、等式の左辺を括って右辺の一般的等価物を表記しているところからも見て取れるだろう

初本文では商品相互の交換関係を捨象して論を展開しているため、「20エレのリンネル = 1着の上着」という等式に含まれている逆関係的な価値表現「1着の上着 = 20エレのリンネル」は、ただ前者の価値表現のなかに潜んでいるだけであり、それはリンネルと上着の交換関係が実現した場合に確実なものとなる、たんなる可能性として想定されているに過ぎない。

ここで A の引用の一部を再掲しよう。

むしろここ〔リンネルの形態Ⅱ〕では、おのおの他の商品体はリンネルの等価物となっており、それゆえリンネルと直接的に交換可能であり、したがってリンネルと位置を取り替えるのである。

ここで「リンネルと位置を取り替える」ことを説明するために、たんに「逆关系的に」と説明するのではなく、わざわざ「リンネルと直接的に交換可能」であるがゆえに「リンネルと位置を取り替える」という回りくどい表現にしているのは、初版の形態Ⅱではリンネルと他の商品との交換関係を捨象し、その交換関係が成立していることを想定していないためであろう。それゆえ、形態Ⅱでは、リンネルは他のあらゆる商品で自身の価値を表現しているだけの状態、つまり「私事」ととどまっているわけである。しかし、形態Ⅲへ移行するにあたっては、リンネル以外のあらゆる商品がリンネルで自身の価値を表現するという「共同事業」が必要になる。それゆえ、形態Ⅲは形態Ⅱのなかに潜んでいるに過ぎないものであるが、それを論じるためにいったんリンネルが他のあらゆる商品と交換関係を結んだと仮定して論を進めるのである。

これが、形態Ⅳが必要になるゆえんである。商品相互の交換関係を捨象して叙述を進める初本文であっても、リンネルの形態Ⅲを論じるにあたっていったんリンネルと他のあらゆる商品との交換関係を前提しなければならない。そのため形態Ⅳで、そのような前提が形態Ⅲへの移行において暗黙のうちに導入されたことを省みて、リンネルの形態Ⅱが何の条件もなしに形態Ⅲへと移行できないということを断っておかなければならなかったのだ。つまり、この形態Ⅳは形態Ⅲの補論として位置付けられているのである。

ここまです踏まえれば、形態Ⅱから形態Ⅲへの移行の意味、つまり商品の「私事」が商品世

(MEGA II/6, 96, 邦訳123頁)。

1着の上着	=	} 20エレのリンネル
10ポンドの茶	=	
40ポンドのコーヒー	=	
1クォーターの小麦	=	
2オンスの金	=	
1/2トンの鉄	=	
x量の商品A	=	
その他の商品	=	

界の「共同事業」になることの意味もいっそう明確になるだろう。

実際、ある人が自分のリンネルを多くの他の商品と交換し、それゆえリンネルの価値を一連の他の商品で表現するならば、必然的に多くの他の商品所持者もまた自分たちの商品をリンネルと交換しなければならず、それゆえそれらのいろいろな商品の価値を同じ第三の商品で、すなわちリンネルで表現しなければならない。

形態Ⅱまでは、リンネルがいろいろな他の商品をかかって持ってきてそれで自分の価値を表現するだけであり、「私事」にとどまっていた。つまり、形態Ⅱの段階でも、必ずしも自身の価値表現を行っている他の商品との交換関係が成立している必要はなかった。しかし、形態Ⅲが成立するには、リンネルと他のあらゆる商品との交換関係が成立していることが想定され、その交換関係に含まれている逆の価値表現が成立していることが必須であった。つまり、商品世界のなかで諸商品の関わり合い方に変化がもたらされるのだ。この商品世界の「共同事業」こそが一般的等価形態を、ひいては貨幣の力を根源的に特徴づけているのであって、商品相互の交換関係を捨象する初本文の叙述では展開できなかった内容なのである。

### 3. 価値表現の回り道と sich beziehen / verhalten

#### 1) 価値表現の回り道と商品語

前節で見た通り、初本文からは『経済学批判』の理論的限界を乗り越えるために価値形態論と商品相互の交換関係を徹底して分離して論じようとするマルクスの問題意識がうかがえる。しかし、商品相互の交換関係は初版付録と第二版でふたたび叙述のなかに戻ってくることになる。価値形態論のなかでのこの交換関係の取り扱いの違いこそ、初本文と第二版・初版付録のあいだの叙述の差異を生み出しているものであり、この違いによって初本文では形態Ⅳが、第二版・初版付録では貨幣形態が価値形態論で論じられる最後の形態となった。そこで問題になるのが、商品相互の交換関係を含む初版付録と第二版の価値形態論と、それを捨象する初本文の価値形態論の違いである。

商品相互の交換関係からそこに含まれる価値形態をつかみ出すにあたっての要となるのは、「価値形態論の「回り道」」（大谷 2018, 491頁）だ。価値形態論では、「いわゆる「価値表現のメカニズム」の核心をなす価値表現の「回り道」」（同上）が展開されており、そのなかで決定的な役割を果たすのが „sich beziehen“ ないしは „sich verhalten“ という言い回しである。

〔価値表現の回り道において〕商品A（リンネル）が、……商品B（上着）にたいして、おまえは〈自分と価値が等しいもの〉すなわち等価物（Äquivalent）なのだとして関連する

(sich beziehen),あるいは関わる (sich verhalten) ことによって,商品Bに〈商品Aと価値が等しいもの〉すなわち等価物という形態,等価形態 (Äquivalentform) を与える。商品Aのこの連関 (Beziehung),あるいは関わり (Verhalten) によって,商品Bは,商品Aにたいしては,〈商品Aと価値が等しいもの〉という意味をもつものとして,商品Aによって〈商品Aと価値が等しいもの〉として認められたもの,商品Aにたいして〈商品Aと価値が等しいもの〉として通用できるものとなる……。 (大谷2011, 257頁)<sup>33)</sup>

リンネルが上着に対してそれを自分と等しいものとするようにして関わることで上着を価値体にし,それによって同時に価値体となった上着に関連することで,リンネルは上着身体において自身の価値を表現する。こうした回り道を経ることでリンネルは自身の価値を表現できる。そして,この価値表現の回り道を設定するのが, sich beziehen / verhalten で表されるリンネルの能動的な行為である。このように価値を表現する側の商品 (たとえば「20エレのリンネル = 1着の上着」におけるリンネル) の「能動的な連関,関わりを言い表わす語が sich beziehen であり sich verhalten なのである」(同上, 258頁)。

第二版では,このような価値表現の回り道の特徴的に表現した商品語の比喩<sup>34)</sup>が登場する。

商品価値の分析がさきにわれわれに語ったいっさいのことを,リンネルが他の商品,上着と交わりを結ぶやいなや,リンネル自身が語るのである。ただ,リンネルは,自分だけが知っている言葉で,商品語で,その思いを打ち明けるだけである。労働が人間的労働という抽象的属性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために,リンネルは,上着がリンネルと等しいものとして通用する限り,したがって価値である限り,リンネルと同じ労働から成り立っていると言う。リンネルの崇高な価値対象性がリンネルのどこもない身体とは異なっているということを言うために,リンネルは,価値が上着に見え,したがってリンネル自身が価値物としては上着と瓜二つであると言う。(MEGA II/6, 85, 邦訳101頁)

リンネルは自身の価値を自身の使用価値で直接に表現できないため,その価値の表現のためには,上着に対して自分と等しいものとするようにして関わることで「価値が上着に見え」るようにし,そうして「価値物としては瓜二つ」になった上着に関連しなければならない。このように商品語は,価値表現の回り道の内容をリンネルの主観から表現した比喩であり(「リンネル自身が語る」,「リンネルは……その思いを打ち明ける」),この回り道の設定におけるリ

33) 本稿では,「S bezieht / verhält sich auf O als N」というこの価値形態論において決定的な論理を含む言い回しを,「SがOに対してNとするようにして関連する/関わる」と訳出・記述する。

34) 商品語の論理が価値形態論の叙述において果たす積極的な役割については,佐々木 2021, 184-199頁を参照。

ンネルの能動性を端的に表現しているのである。

第二版では、sich beziehen / verhaltenによる相対的価値形態にある商品の能動性の表現に加えて、この商品語の比喩が登場したことで、商品相互の交換関係に含まれている二つの価値表現の区別が明確になされるようになった。それゆえ、初版本文で捨象されていた商品相互の交換関係を本文に導入し、価値形態の発展における理論的前提としての商品相互の交換関係の発展にも言及することができるようになったのだ。以下では、このようなsich beziehen / verhaltenの把握にもとづいて、初版付録から第二版への改稿過程を追跡し、そこにおけるマルクスの意図を明らかにしていこう。

## 2) 初版付録における叙述の特徴

第二版へ改稿される際のベースとなった初版付録<sup>35)</sup>では、このsich beziehen / verhaltenが受動態で用いられるなど、もともと相対的価値形態にある商品の能動性を積極的に表現するこの言い回しが、その能動性を曖昧にするような使われ方をしている箇所が散見される。こうした使用法は第二版では見られない。初版付録の「I. 単純な価値形態 § 2. 相対的価値形態」の部分に登場する該当箇所を見てみよう。

〔①〕……リンネルが上着に対してそれを自分と等しいものとするようにして関わる〔sich verhalten〕, すなわち, 上着が同じ実体のもの, 同じ本質のものとしてリンネルに関連させられる〔bezogen werden〕。(MEGA II/5, 629, 邦訳134頁)

〔②〕したがって, リンネルが上着に対してそれを自分と等しいものとするようにして関わる〔sich verhalten〕ということ, あるいは上着が同じ実体を持つものとしてリンネルに等置される〔gleichgesetzt werden〕ということは, 上着がこういった関係において価値として通用することを表現している。(ibid.)

〔③〕したがってリンネルは, 人間的労働を唯一の素材とする一身体としての上着に関連させられる〔bezogen werden〕ことなしには, 一つの価値物としての上着に関わることはできない, すなわち, 価値としての上着に関連させられる〔bezogen werden〕ことはできない。(ibid., 630, 邦訳135頁)

引用①と②について見れば、文章の前半で「リンネルが上着に対してそれを自分と等しいも

---

35) 「補足と変更」の価値形態論部分の冒頭に「764ページ」(MEGA II/6, 7, 邦訳(上) 59頁)と書かれており、これは初版付録の最初のページである。ただし、後出の[B]の箇所のように、改稿の途中で変更して初版本文に手を加えるようにした部分もある(佐々木 2021, 194頁)。

のとするようにして関わる」と叙述している部分に関しては、*sich beziehen / verhalten* がリンネルの能動性を積極的に表現しているが、それに続いて、並列的に「上着が同じ実体のもの、同じ本質のものとしてリンネルに関連させられる」「上着が同じ実体を持つものとしてリンネルに等置される」と叙述してしまっている。すなわち、「リンネルの上着にたいする関わりによる上着への形態規定性付与と、上着がある規定性のもとにリンネルに等置されることが並列されており、商品語の論理が曖昧になっている」（佐々木 2021, 195頁）。もちろん、上着が「同じ実体のもの」としてリンネルに関連させられるという事態は、リンネルが上着に対して「それを自分と同じものとするようにして関わる」ことの結果であり、その行為の裏返しである。しかし、ここで決定的に重要なのは、リンネルの上着に対する関わりというリンネルの能動性であり、それが上着の受動性と併記されることによって、リンネルの能動性が曖昧にされてしまうのである。そして引用③をみると、リンネルを主語とする *sich beziehen* が受動態で使われており、この用語法で強調されるはずのリンネルの能動性が失われてしまっている。

なぜこれらのような表現が用いられているかといえば、すでにリンネルと上着の価値関係が成立しているという状態を前提しているからである。いうまでもなく、この価値関係を成立させるのはリンネルの能動的な行為であって、リンネルが上着に対してそれを自分と同じものとするようにして関わることで上着の身体はそのまま価値を表す価値体となるのであり、そしてその上着身体を用いてリンネルは自身の価値を表現するのである。このリンネルの能動的な行為がない限り、上着の現物形態は使用価値しか表しておらず、それを用いて価値表現をすることは不可能である。しかし、いったんリンネルと上着の間に価値関係が成立した状態を想定し、その状態にある上着とリンネルを観察すれば、引用①と②におけるリンネルの主体性が曖昧にするような、リンネルの能動的行為と上着の受動的状态を併記する叙述が成立することになる<sup>36)</sup>。

### 3) 「補足と変更」における改稿過程

第二版の価値形態論では、前項で見てきたような相対的価値形態をとる商品の能動性を損なうような *sich beziehen / verhalten* の使い方はなくなり、さらに後述の商品語の登場によってその能動性が強調されている。こうした叙述の変更におけるマルクスの意図は、『資本論』第

36) 初版付録にリンネルの能動性を曖昧にするような表現がくり返し登場するのは、それが「弁証法的な思考にまったく不慣れな読者」向けに書かれた、「価値形態の補足的な、もっと教師的な説明」であることが大きいと考えられる。実際、付録には回り道の論理の説明は登場せず、全体を通して価値関係がすでに与えられているものとして、それぞれの価値形態の特徴を説明していくというスタイルで叙述が展開される。そして、相対的価値形態にある商品の能動性を強調するために、「イニシアチブ」という用語を用いている。*sich beziehen / verhalten* の場合には動詞としてリンネルの動きを積極的に表現していたのに対し、こちらでは形容詞によって外在的にリンネルの能動性を表現することになっている。

二版の刊行のために執筆した「補足と変更」と呼ばれる草稿によっても裏付けることができる。ここではこの「補足と変更」の「相対的価値形態の内実」部分における sich beziehen / verhalten の使用法の変化をたどっていく<sup>37)</sup>ことで、前項で見た初版付録における sich beziehen / verhalten を曖昧にする使い方が改稿を経て第二版では完全になくなることを確認しよう。

まずは「補足と変更」<sup>38)</sup>のこの部分 (MEGA II/6, 8.23-13.31<sup>39)</sup>, 邦訳61-67頁<sup>40)</sup>) の構成を確認しておく。前半部分 (8.23-11.26) は, [A] (8.23-9.39) と [B] (10.1-11.26) の二つのバージョンの部分草稿からなっており, それぞれ [A<sub>1</sub>] [A<sub>2</sub>], [B<sub>1</sub>] [B<sub>2</sub>] を含んでいる。後半 (11.28-13.31) は, 11の段落から形成されている。

まず [A] では sich beziehen / verhalten は4箇所が登場する。

〔④ ([A<sub>1</sub>]))〕 実際, 20エレのリンネル = 1着の上着という表現において, リンネルは上着に対して上着と同名の大きさとして関連させられ [bezogen werden], 上着に質的に等置される。(ibid., 9.2-4, 邦訳61頁)

〔⑤ ([A<sub>2</sub>]))〕 20エレのリンネル = 1着の上着であろうと, 2着の上着であろうと, x着の上着であろうと, どの場合でも商品リンネルは, 異なる種類の商品, 上着に対して, 同本性の物として, すなわち自分に等しいものとして関連させられ [bezogen werden], すなわちリンネルは上着に質的に等置される。(ibid., 9.13-16, 邦訳62頁)

37) 本項でおこなう改稿過程の追跡は, 佐々木 2021でもおこなわれている (194-196頁)。それは物象化論との関連で商品語を論じている箇所においてであり, 商品語の論理が第二版で確立されたことを示すために「補足と変更」の改稿過程を追跡することが目的であった。本項では, 佐々木 2021に依拠するところも大きい。価値表現の回り道に関わる叙述が初版付録から第二版への改稿においてどのように変化したかを見るために, 当該範囲の sich beziehen / verhalten の使用法を網羅的に確認している。そのなかで, 「補足と変更」で最後まで不適切な用法が一箇所のこっていたが (後出の引用⑩), 第二版では別の表現に書き改められてなくなったことを明らかにした。

38) 本草稿は書き換えのための草稿という性格ゆえ, 多くの線引きによる抹消箇所を含んでおり, また同じ内容について複数の叙述が登場している。これらを MEGA に収録する際には, 関連のある叙述が分散して登場する場合があるため, 内容が『資本論』の目次順に従うように編集が加えられている。こうした編集が加えられたのち, 同一内容について複数の部分草稿が存在する場合は, MEGA 編集者によって付けられた [A] [B] …というアルファベットの表示とともに執筆順に記載される。それぞれの部分草稿のなかにさらに複数の部分草稿が存在する場合は [A<sub>1</sub>] [A<sub>2</sub>] …あるいは [B<sub>1</sub>] [B<sub>2</sub>] …という表示が与えられ, そのなかにも複数の部分草稿がある場合は, [A'<sub>1</sub>] [A'<sub>2</sub>] という表示が与えられている。

39) 以下の「補足と変更」の出典表記には行数 (ピリオド以下の数字) も記載した。

40) 以下で引用する「補足と変更」の邦訳はすべて「(上)」に掲載されている。なお, この翻訳においては, 本節の論点である sich beziehen / verhalten についての訳し分けは十全になされていない。また, 抹消部分等が記録された別冊資料 (Apparat) は訳出されていない。

〔⑥〕もし、商品 A 自身が価値でないならば、その商品は価値としての他の商品に対して、すなわち自分と等しいものとしての他の商品に対して、関連する〔sich beziehen〕ことはできないだろう。(ibid., 9.23-24, 同上)

〔⑦〕さて、ある商品 A たとえばリンネルは、自分と価値が等しいものとしての、すなわち自分の等価物としての、なんらかの他の商品 B たとえば上着に関連させられる〔bezogen werden〕というのは、どのようにしてなされるのか？(ibid., 9.26-28, 同上)

sich beziehen は引用④、⑤、⑦では受動態として用いられおり、引用⑥では能動態では用いられているものの、すでにリンネルと上着の価値関係が成立した状況で上着に対してリンネルが関わるのが問題になっているため、なぜその上着が価値体になるのかを解明した「価値表現の回り道」が示されているわけではない<sup>41)</sup>。また、引用⑦に対する抹消箇所を見ると、上記のように〔Wie wird nun eine Waare A, ... bezogen〕書く前に、「商品 A は〔……〕関連するのは、どのようにしてなされるのか」〔Wie bezieht die Waare A〕という書きかけが消されており、ここではマルクスが意図的に受動態を使っていたことがわかる。以上より、[A] の試みでは、まだ sich beziehen / verhalten が「価値表現の回り道」を表現するのに十分な使い方がなされているとは言えないことが明らかとなった<sup>42)</sup>。

次に [B] の段階に入ると、sich beziehen / verhalten が登場する [B<sub>1</sub>]<sup>43)</sup> と [B<sub>2</sub>] の両方で、

41) この箇所は、構文だけ見てみるとリンネルの能動的な行為を表す場合の sich beziehen と同じ用法であるが、記載した通り、文脈からしてここではそのような文法解釈をするのは適当ではない。前後の文章は次のとおりである。「何らかのある商品 A と何らかの別の種類の商品 B のこの等置は、ある商品の他の商品との価値関係である。使用対象としては諸商品はさまざまであるが、それらの価値がそれらの統一性すなわちそれらの共通の実体をなすのである。ところが、商品 A が他の商品 B との価値関係にはいることによって、それ自身の価値が現われるのである。〔引用⑥〕もし、商品 A 自身が価値でないならば、その商品は価値としての他の商品に対して、すなわち自分と等しいものとしての他の商品に対して、関連することはできないだろう。したがって、この関連は商品 A 自身の価値の表現である」(ibid., 9.18-25, 同上)。この引用⑥と同じ用法が、S. 9.7 に対する抹消箇所 (ibid., 832), S. 9.9 に対する抹消箇所 (ibid.), S. 9.25 に対する抹消箇所 (ibid., 835), S. 9.35-39 に対する抹消箇所 (ibid., 836), S. 9.39 に対する抹消箇所 (ibid.) にも見られる。また、引用⑥と同様の文章は初版本文でも登場している (MEGA II/5, 29, 邦訳44-45頁)。第二版でもほぼ内容的に同じ文章が登場するが、こちらでは、sich beziehen は用いられず、„ist bezüglich“ という表現に変更されている (MEGA II/6, 83, 邦訳97頁)。

42) 佐々木は [A] の試みで sich beziehen / verhalten がこのように使用された理由を次のように解釈している。「マルクスが [A] においてなぜさらにリンネルの主体性を曖昧にする叙述を試みたのかは判然としないが、おそらく、リンネルが主体となって上着に関連するという、ある意味では「異様な」叙述によるわかりにくさを改善するために、通俗的な説明を試みたのだと思われる。しかしながら、結局、この叙述はうまくいかず、放棄される」(佐々木 2021, 195-196頁)。

43) [B<sub>1</sub>] の段落中盤で、後に商品語の部分でも登場するロマンス語系の動詞の比喩が書かれた一節が

以下の通り第二版と同じ積極的な使い方がなされている。

〔⑧（[B<sub>1</sub>]）〕リンネルが、自身のこの価値存在を表現するのは、リンネルが異なる種類の商品に対して、上着に対して関わり、リンネルが上着に対してそれを自分と等しいものとするようにして関連する〔sich verhalten〕ことによってであるが、この関連においては、上着は事前に照会されることなく、リンネルに質的に等置されるのである。（*ibid.*, 11.2-5, 邦訳64頁）<sup>44)</sup>

〔⑨（[B<sub>2</sub>]）〕リンネルが、自身のこの価値存在を表現するのは、リンネルが異なる種類の商品、したがって手触りからしてリンネルとは異なる商品に対して、上着に対して、それを自分と等しいものとするようにして関わる〔sich verhalten〕ことによってであるが、この関連において、上着は事前の照会もなくリンネルに質的に等置されるのである。（*ibid.*, 11.13-17, 同上）<sup>45)</sup>

[B] の叙述で注目しておきたいのは、商品語の叙述が登場している点だ。[B<sub>2</sub>] の方の当該部分は、引用⑨の一文後に登場する。

リンネル価値の分析がさきにわれわれに言ったことを、いまや、リンネル商品が上着に関わることによって、リンネル自身が語るのである。ただ、リンネルは、自分だけが知っている言葉で、商品語で、その思いを打ち明けるだけである。〔★〕もっとも、商品語はヘブライ語のほかにもっといろいろな、より正確であったりより不正確であったりする方言も持っている。たとえば、ドイツ語の *Werthsein* は、ロマンス語系の動詞 *valere, valer, valoir* ほどはっきりと、商品 B に対する同等性関連を商品 A 自身の価値連関として言い表すことはできない。《*Paris vaut bien une messe.*》（*ibid.*, 11.18-26, 邦訳64-65頁）

[B<sub>2</sub>] ではここまで「価値表現の回り道」の叙述が展開されており、実際、この箇所の一文挟んだ直前に引用⑨が置かれている。それゆえ「リンネル価値の分析がさきにわれわれに言ったこと」の内容は「価値表現の回り道」を指しており、商品語も「価値表現の回り道」につい

---

あるが、そこに対する抹消箇所でも *sich beziehen* の積極的な使い方が見られる（S. 10.33-36 に対する抹消箇所（*ibid.*, 843））。

44) この箇所は2回書き直されているが、抹消された2回とも *sich verhalten / beziehen* は積極的な使い方がなされている（*ibid.*, 846）。

45) この箇所は2回書き直されているが、抹消された2回とも *sich verhalten* は積極的な使い方がなされている（*ibid.*, 847）。

ての比喩であることがわかる。ここからは、商品語という比喩を用いて、「価値表現の回り道」、そしてそれを成立させる *sich beziehen / verhalten* という表現を強調しようとするマルクスの意図が読み取れるだろう。

ただし、第二版では、上記引用の一部が変更されているほか、★の部分に以下の文章が挿入されており、商品語の内容が「回り道」を指していることが明確になっている。

労働が人間的労働という抽象的属性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネルは、上着がリンネルと等しいものとして通用する限り、したがって価値である限り、リンネルと同じ労働から成り立っていると言う。リンネルの崇高な価値対象性がリンネルのぎこちない身体とは異なっているということを言うために、リンネルは、価値が上着に見え、したがってリンネル自身が価値物としては上着と瓜二つであると言う。(ibid., 85, 邦訳101頁)

最後に、「相対的価値形態の内実」の後半部分についても見ておくと、当該表現は3箇所が登場する。

〔⑩〕そして、リンネルの価値関係のなかでは、上着はただこの側面だけから認められる。リンネルは自分と等しいものとしての上着体に対して関わる〔*sich verhalten*〕のであるが、それは上着体が価値体であるからであり、またその限りにおいてである。(ibid., 125-7, 邦訳65頁)

〔⑪〕上着がリンネルに対して価値を表示するということは、実際、同時にリンネルにとって価値が上着で表示されることなしにはできない。個人Aが個人Bにたいしてそれを王位とするようにして関わる〔*sich verhalten*〕ということは、同時にAにとっては王位がBの姿をとり、したがって顔つきや髪の毛やその他なお多くのもが国王の交替のたびごとに替わることなしにできないように。(ibid., 133-8, 邦訳66頁)

〔⑫〕商品Aが商品Bに対してそれを受肉した価値とするようにして、すなわち人間的労働の物質化とするようにして関連する〔*sich beziehen*〕ことで、商品Aは疎遠な商品の身体を自分自身の価値表現の材料にするのである。(ibid., 13.27-29, 邦訳67頁)<sup>46)</sup>

引用⑩はリンネルと上着の関係を個人Aと国王Bの関係に例えている箇所であるが、個人

---

46) この箇所は2回大きく書き直されているが、抹消された2回とも *sich verhalten / beziehen* は積極的な使い方がなされている (ibid., 868)。

Bが国王の姿をとるという状態は個人Aの個人Bに対する能動的な関わりがあって成立することを表現しており、sich verhaltenの使い方としては問題ない。また引用⑫でも、相対的価値形態にある商品の能動性を表現するような使い方がされている。しかし、引用⑩が問題含みの叙述となっている。「リンネルは自分と等しいものとしての上着体に対して関わる」ことは、「上着体が価値体であるから」だと表現されており、上着がすでに価値体になっているからリンネルが上着に関連できる、という論理展開になっている。ここでは、引用⑥と同じように、sich verhaltenが「価値表現の回り道」を成立させるための行為ではなく、すでにリンネルと上着との価値関係が成立している状況での説明に使われている。それゆえ、この部分は第二版で段落ごと使用されているが、最後の一文に関しては直前の一文に組み込まれて以下のように書き直され、引用⑩の問題含みなsich verhaltenは消去された。

そして、リンネルの価値関係のなかでは、上着はただこの側面だけから、したがって、ただ体化された価値としてのみ、価値体としてのみ、通用する。(ibid., 84, 邦訳100頁)

以上が「補足と変更」における価値形態論の改稿過程である。当初[A]で複数回に渡って登場した「リンネルが上着に関連される」という表現が[B]では登場しなくなった。さらに依然[B]でも残っていた、リンネルと上着の価値関係を前提とした叙述(引用⑩)も、最終的に第二版ではなくなったことが明らかになった<sup>47)</sup>。ここからは、sich beziehen / verhaltenの用法が相対的価値形態にある商品の能動性を強調するように徹底されたことが見て取れるだろう。そして、商品語の叙述が[B]で登場し、それが第二版の文章ではいっそう展開されるようになった。これらを通して、マルクスは第二版で価値形態論を書き換えるにあたって、商品相互の交換関係を叙述に含む初版付録をベースとしながらも、初版本文における「価値表現のメカニズム」の内容を損なうことなく、むしろ一部は強化して叙述を仕上げたのである。

## おわりに

以上が、初版付録と第二版での価値形態論の構成とは異なり、初版本文でのみ形態Ⅳが登場

---

47) リンネルと上着の価値関係を前提として論を進めている箇所は第二版の「3) 等価形態」で登場するが、ここではリンネルの上着に対する関わりが完了形で表示され、この価値関係がすでに成立していることを明確にするような表現が使用されている。「等価形態は、ある商品体、たとえば上着が、このあるがままの姿の物が、価値を表示しており、したがって生まれながらに価値形態を持っているということ、まさにそのことによって成り立っている。いかにも、このことは、ただリンネル商品が上着商品に対してそれを等価物とするように関連している〔bezogen ist〕価値関係のなかで通用するだけである」(ibid., 89)。

した背景の分析である。第1節で見た久留間のコメントで指摘されていたように、初版本文の価値形態論には「観点の抽象性」があった。第2節では、その「抽象性」を分析すべく、大谷(2018)が展開した「商品相互の交換関係」という観点から第二版と初版本文の比較・検討をおこなった。初版本文の叙述では、価値形態を論じる際に商品相互の交換関係を極力捨象しようとしているのであるが、それは『経済学批判』の商品論で試みた価値表現の展開の不十分さを克服しようとしたものであった。そして、それが原因となって初版本文の価値形態論全体が、形態Ⅳに象徴されるような抽象的な性格を帯びるようになったこと、さらにその「抽象性」ゆえに一般的価値形態における重要な論点である「商品世界の共同事業」が初版本文では展開できなかったことを明らかにした。

そこで第二版では、「問題の科学的な把握が許す限りでこの問題を単純にまた教師風にさえ叙述」した初版付録をベースにしつつ、相対的価値形態にある商品の能動性を強調することによって、商品相互の交換関係に言及しつつも、そこに含まれる価値表現の内容を十全に展開できるようになったのである。第3節では、この書き換えをマルクスが意図的におこなっていたことを、第二版刊行のために執筆された「補足と変更」における改稿過程を追跡することによって確認した。「補足と変更」の検討を通して、当初は相対的価値形態にある商品の能動性を強調するはずの *sich beziehen / verhalten* が受動態で使われている箇所や、すでに価値関係が成立している状況を叙述するのに *sich beziehen / verhalten* を使用されている箇所があったものの、これらの不適切な用法は改稿過程でなくされていったことを確認し、「補足と変更」で最終的に残っていた不適切な用法も最終的には第二版で書き換えられてなくなったことを明らかにした。また、その能動性を強調する表現として商品語が導入されたことを見た。このようにして、初版本文における「抽象性」は克服されたのである。

以上から、初版から第二版への改稿は、たんに叙述が平易にされたり、「弁証法的ではない読者」のために書かれた初版付録の叙述にひきずられて価値形態論の「弁証法的」性格が失われたりしたものではけっしてなく、「価値表現のメカニズム」の核心である「価値表現の回り道」の叙述を強化したものであったことが明らかになった<sup>48)</sup>。また、商品相互の交換関係に言

---

48) たとえば吉村のように、初版本文の方が第二版よりも優れていると捉える論者もいる。「マルクスは、『資本論』現行版以前の、初版の本文における価値形態論においては、複数の等価値形態が並立する価値形態の「形態Ⅳ」をその結論としているが、商品経済的な論理に即した場合、自らも「教師風の説明」とみなした、金貨幣の生成を結論とする通俗的な展開をなした初版付録の価値形態論（貨幣形態の独占を説いている現行『資本論』の価値形態論）よりも、「単純な相対的価値表現の決して終結することのない列」を説いていた初版本文のそのほうが、理論的にはむしろ至当なものといえる」（吉村 2019, 32頁）。たしかに、純粹に形態的な観点から見れば初版本文の方が「弁証法が鮮明」であるという面はあるだろう。しかし、その形態を成立させる理論的前提は商品相互の交換関係にある。第二版では価値表現の回り道の叙述を強化することによって、形態分析のなかで、その分析を損なうことなくこの商品相互の交換関係にも言及できるようになり、また「商品世界の共同事業」や「商品語」といった叙述も展開できるようになったという面を見逃してはならない。

及するようになったことで、「商品世界の共同事業」といった重要な叙述も本文中で展開できるようになったのである。こうした観点からすれば、第二版への改稿過程を経て、価値形態論はより深められ、理論的により豊かなものになったと言えるだろう。

#### 参考文献

マルクスからの引用は、基本的に新MEGA版 (Marx/Engels *Gesamtausgabe*, Berlin, 1975ff) を用い、  
出典の表記にあたってはMEGAと略記したうえで、部門、巻、頁を附した (頁数にピリオド以下がある場合は行数を示す)。本文中で言及している著作と参照した邦訳は以下の通りである。

- MEGAII/2:『経済学批判』(資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集』③, 大月書店, 1984年)  
MEGAII/4.3:「解題」(付属資料)(隅田聡一郎監訳「MEGA 第I部門第四巻(1863-1868年経済学草稿)第三分冊解題(上)」『マルクス研究会年誌』第6号, 2023年)  
MEGAII/5:『資本論』第一巻初版本文(1-625), 付録(626ff)(岡崎次郎訳『資本論第一巻初版』, 大月書店, 1976年)  
MEGAII/6:「『資本論』第一巻への補足と変更」(1-54)(小黑正夫訳「カール・マルクス『資本論』第一巻のための補足と改訂(1871年12月-1872年1月)」(上)(下)『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第5・7号, 1989年), 『資本論』第一巻第二版(57ff)(岡崎次郎訳『資本論』①, 大月書店, 1972年)  
MEGAII/8:ヨハン・モスト『資本と労働』(733-787)(ヨハン・モスト『マルクス自身の手による資本論入門』, 大月書店, 2009年)
- 尼寺義弘(1992)『ヘーゲル推理論とマルクス価値形態論』, 晃洋書房  
大河内泰樹(2010)「発生と形式——物象化の系譜学としての「価値形態論」」岩佐茂編『マルクスの構想力——疎外論の射程』, 社会評論社  
大谷禎之介(2011)『マルクスのアソシエーション論——未来社会は資本主義のなかに見える』, 桜井書店  
大谷禎之介(2018)『資本論草稿にマルクスの苦闘を読む——『資本論』第2部第8稿全文とその関連資料を収録』, 桜井書店  
奥山忠信(1990)『貨幣理論の形成と展開——価値形態論の理論的考察』, 社会評論社  
小黑正夫(1988)「価値形態論改訂のための準備草稿「『資本論』第一巻のための補足と改訂(1871年12月-1872年1月)」について」『経済』No.295  
久留間鮫造(1957)『価値形態論と交換過程論』, 岩波書店  
久留間鮫造(1979)『貨幣論——貨幣の成立とその第一の機能(価値の尺度)』, 大月書店  
佐々木隆治(2021)『マルクスの物象化論[新版]——資本主義批判としての素材の思想』, 堀之内出版  
富塚良三(1962)『恐慌論研究』, 未来社  
中野正(1987)『中野正著作集 第一巻 価値形態論』, 森田企版  
廣松渉(2010)『資本論の哲学』, 平凡社  
降旗節雄(2020)『[新版]貨幣の謎を解く——価値形態論から現代金融まで市場経済の貨幣論的分析』, 白順社  
Fröhlich, Nils (2003), “Die Marx’sche Werttheorie: Darstellung und gegenwärtige Bedeutung,” Arbeitspapier TU Chemnitz.  
Hecker, Rolf (1987), “Zur Entwicklung der Werttheorie von der 1. zur 3. Auflage des ersten

- Bandes des “Kapitals” von Karl Marx (1867–1883),” in: *Marx-Engels-jahrbuch* 10.
- 吉村信之 (2019) 「金融化」の現代的諸問題とマルクス経済学『季刊経済理論』第55巻第4号
- Lietz, Barbara (1984), “Zur Bedeutung der Vorarbeiten zur deutschen Ausgabe vom ersten Band des “Kapitals” für die Marx-Engels-Forschung,” in: *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung*, Bd.16.